

## 文展審査員諸家の感想

文展審査所感

黒田清輝

本文展鑑査の及第品數が出品總數に比して小數であるのは例年よりも成績の悪い證據ではあるまいかと世人に疑はれる傾があるやうであるが、これに對しては鑑査が嚴重であつたと云ふことも云へない。この嚴重と云ふ言葉は如何なる意味で言はれるのか情實の行はれなかつたと云ふのか、鑑査の標準を高くして之を嚴守したと云ふのか、それぞれに考へられて其意を得ない。

故に鑑査について自分の感を言ひ表すにはこの嚴重といふ言葉では少し意味が盡されない様である。一口にいへば鑑査に付ての及落の境界線の程度の高下は高くするとか低くするとか云ふよりも寧ろ高めさせられたとか低くさせられたとか受身になる方であると言ひたい。

さて及第數の減ずるといふことは一寸考へると如何にも良い繪が少なかつたと云ふ意味を表はして居るやうであるが實際は成績が悪かつたとか昨年よりも退歩したとかいふ事はない。鑑査の程度の高くなつたことは、言はざる良い繪が多數あつたといふ事で、若し昨年と同じ程度に及第の境界線を持つて行けば少くも今年は百二十點の及第品を得たであらう。先づ數の上から凡そ二百點が及第の候補として選ばれたとすればこの二百點は少くも第四五回には立派に及第す可きものであるが今日の出品全體の程度に鑑みて自然に高い境界線を得て茲に前年より反つて小數の及第を見るに至つたのである。今年の百二十番は昨年に於て又今年の百四五十番は一昨年に於て

は當然な及第品と言ひ得る様に年を追ふて進歩して來て居る。この年々推移して行く標準線は決して豫め豫定も期待もせらる可き者でなくその年々の出品に依つて吾々が教へられるのである。出品の成績が偶然に示して呉れるのであるから、及第點數の少ないのが全體の上から技術の進歩と云はねばならぬ。今一つ進歩しつゝある證據としては從來新進作家として既に認められた人と新に頭をあげた後進作家との間にその手腕に於て大差を見なくなつたと云ふとである。

これは古參作家が退歩したのではなく、後進作家が進歩したのである。そして又以前に遡つて考ふれば當然傑作佳作ともせられ得る作品が今日の目で見ると一向に目立たなくなつて來た。つまりまちまちに芽生えた若草が伸びそつたのである。誠によろこばしい次第であるが、更にこの上にまた傑作が出來れば更に高い進歩なのである。今之を西洋のサロンに比して如何と云ふことは、はつきり言ひ難いことでサロンも種々ありその性質々に應じて鑑査標準も一定しては居ないと思はれる。兎も角東西を通じて草のひくいところは同じだが、彼に比してこちらには未だ丈高く伸びたのが無いやうである。そも々々洋畫が輸入せられてからの日本といふものは未だ至つて若いのであつて畫家の年輩の經歷からいつても追付かない。西洋には七十八十の老大家が居るに比しこゝでは打ち見るところ六十年以上の經歷ある洋畫家を見ない。

今のところ日本の作家で最も活動して居るのが三十歳前後であらうが、この年輩を以て西洋の同年輩の人々に比ぶればさまで劣つたものと思はれない。更に二十五歳前後を以て比較すれば日本の方がスツトウまいやうだ。唯だ惜しいことには四五十年となると西洋の方がぐんと伸びて居る。(談) 『美術新報』三六一 大正五年二月一七日

第一〇回文展（大正五年二月四日～二月二〇日）をふまえての所感。